

204) ペンキや

その昔、夏休みのアルバイトでペンキ屋の助手をしていたことがありました。ペンキ屋の息子と友達で、そいつと一緒に親父の手伝いをしていたのであります。あるとき農家の物置きかなんかにペンキを塗っていたのですが、オイラの仕事はなんでもオイルステインとか何とかいう防腐剤を木材に塗る作業でした。ところが足場が良くなかったというか、梯子の片方の足が地面に潜り込んで傾き、アレレと思ったときには梯子もろともひっくり返ってしまったのであります。オイラはペンキが顔や身体にかからないようにうまく倒れたつもりだったのですが、落ちた場所がよくなかった。そこには日本の田舎独特の文化が埋まっていたのであります。今ではさすがにどんな田舎に行っても見られなくなってしまった『肥だめ』が鎮座していたのであります。ものの見事にもんどり打って背中から突っ込んでしまったのでした。イヤー臭いの何のって、一言では表現できないほどの惨めさであります。当時はシャワーなんて言うものはなかったから、井戸水を頭からかぶって、洗い清めて事なきを得たのですが、夏だったからいいようなものの、みんな他人事だと思って、クセーだのキタネーだの、挙句の果ては涼しくてヨカンペーと言って、ゲラゲラ笑っているのです。しかしよくよく考えてみると、この『肥』なるものが適度のクッションになって、ケガーつせずに済んだのであります。しかしこれが縁でペンキ塗りのアルバイトをやめました。